



Title	日本語の発音指導のためのビデオ教材の開発と評価 音声のない世界を体験させることをとおして
Author(s)	山口, 康子; 大谷, 尚
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 9, pp.113-126; 1986
Issue Date	1986-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/30024
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-17T05:55:09Z

日本語の発音指導のためのビデオ教材の開発と評価

—音声のない世界を体験させることをとおして—

山口 康子* ・ 大谷 尚**

(昭和60年10月31日受理)

Development and Evaluation of a Videotape Recorded Teaching Material for Teaching Japanese Pronunciation by Experience of Deaf World

Yasuko YAMAGUCHI and Takashi OTANI

(Received October 31, 1985)

あらまし

小論では、「聴覚障害児の言語活動を、聴覚障害のない者に疑似的に体験させることを目的とした、音のない部分を持つビデオ教材」について、その開発、ろう教育担当者の講習会での使用、受講後に行ったアンケート調査による本教材の評価について報告している。また、同じ教材の、教員養成学部での国語教材研究の講義「日本語の特色 ～音声と音韻～」での使用についても報告している。最後に、同様の教材の、発音・発声指導での利用の展望を述べている。

1 本教材製作の背景と動機

筆者らのうち山口は、長崎県が実施する教育職員免許法認定講習「ろう教育」の「言語指導の理論」を、まず1978年に担当した。そもそも、日常生活としての「音のない世界」をろう教育担当者が意識することは、ろう教育の前提である。しかし、この時の講習の終了後に強く感じたことは、ろう教育担当者が、みずから無音の世界を実感できず、そのことが、彼らが聴覚障害児の言語指導をする際の、ひとつの壁になっているということであった。そこで、1983年に、再び認定講習を担当することになった時、今回の講習では、この事を解決するための、なんらかの工夫が必要であると考えたのである。

ところで我々にとって、視覚のない暗黒の世界は、目をつぶるだけですぐに体験できる。そのため、その不自由さも実感しやすい。それに対して、音が聞こえない「音のない世界」は、なかなか体験できない。たしかに、音声を消したテレビを見ることによって、それに近い体験をすることができる。しかし、ドラマなどのテレビ番組では、話者が、必ずしも顔をこちらに向けているわけではない。また、ニュースなどの番組では、話者の顔はこちらを向いているが、内容が難しすぎるし、話す速度が速すぎる。以上の理由から、これらは、音の聞こえない状態での日常生活における「対話」とは異なっている。また、同じ理

* 長崎大学教育学部国語科教室

** 長崎大学教育学部附属教育工学センター

由で、上の目的のための教材として、これらをそのまま使うことはできない。

そこで、筆者らは、音声を消した発音・発生の口形をビデオで映し、受講者にそれを見せて、話の内容を理解できるかどうかを体験させることによって、聴覚障害児の言語活動を疑似的に体験させるような教材を、製作する計画を立てたのである。

II 本教材の開発の目的

日本語は、音節数が少なく、音韻的には、比較的単純な言語である。とくに、母音数5の開音節構造（全ての音節が母音で終わる）のため、似たような口形になることが多く、読唇は必ずしも容易でない。その上、筆者らのうち、山口の個人的な所見ではあるが、最近の傾向として、（とりわけ若い男性は、）口の開け方が小さく、発音の不明瞭さが目立ち、口形も判別しにくくなってきている。ろう教育担当者はとくに、これらのことを自覚することが必要であろう。

ところで、実際に発音せずに、口形だけをまねても、決して発声時と同じ口形はできない。また、人間の発声はきわめて一回性の強いもので、くりかえした2回の発声・口形は、決して同一にはならない。さらに悪いことには、このようなときには、意識すればするほど、口形は微妙に違ってしまふものである。それゆえ、音のない世界を体験させるために、講義者が、発声せずに口形だけをまねたり、発声しない口形と発声する口形とを交互に見せたりすることは、不適當である。

しかし、ビデオ教材であれば、1回の発声の映像を用いて、それを何回もくりかえして提示するように編集したり、同一の映像の音声を消したものと音声を伴うものとを、交互に提示するように編集したりすることができる。このような教材によって、口形で人の話を理解することが可能かどうかを受講者に判断させ、聴覚障害者の世界を、みずから体験させようとするのである。さらにそのことが、ろう教育担当者が、より正しい口形での発音・発声をめざすことを心がける契機にもなることを、ねらいとするものである。

また、ろう教育担当者だけでなく、教師になることを志望する本学部の学生たちが、これらのことを理解することは重要であり（後述）、そのような学習のためにも利用できるような教材として、開発したいと考えた。

ただしそのためには、特に正しい口形や、上手な朗読を提示するのではなく、日常生活で普通に見かけるような口形・発音を提示することが必要である。

必要とする教材について、このようなおおまかなイメージを描いたところで、既存・市販の同様な教材を探したが、発見することができなかった。そこで、教材の構成についてのさらに詳しい計画を立てて、製作に入った。

III 教材の構成

教材は、音節・単語・文・文章の各レベルで、読みとりと発声指導がそれぞれ可能であるように構成した。（以下の単語や文章については文献1と2（後出）を参考にし、一部利用した。また、実際に作成したテキストは、資料1として提示する。）

〈 第1部・短文 一導入部として一 〉

口形判断の方法を示すため、導入として、短文ふたつから成る短い文章を、まず、①

[映像のみの無声で示し], ② [次に1秒ほど間を置いて, 同じ映像を音声を伴って示す]。以下の各部においても, 口形判断は, この①②をくりかえすことによって行う。すなわち, まず①で口形だけを示し, 受講者に各自で内容を判断させ, メモなどをとらせた後で, 直ちに②で正解(音声)を示すという方法である。短文は, 語よりも簡単ではないが, 導入部として教材の意義を受講者に自覚させるため, 最初に使用した。

〈 第2部・音節 〉

音節の種類による見出しをテロップ(カード)で示した後, それぞれの音節を, 前記の①と②のくりかえしによって示す。音節の種類と提示の順序は, 次のとおりである。

- | | | | |
|---------|-------------|---------|---------|
| 1) 母音 | 2) はねる音 | 3) はれつ音 | 4) はじき音 |
| 5) まさつ音 | 6) はれつ・まさつ音 | 7) 鼻音 | 8) 半母音 |

〈 第3部・五十音図 〉

日本語の音節構造を認識する過程として, 五十音図を入れる。日本語における母音と子音の関係の理解に役立てる。

- 1) 行で読む(各行ごとに①②の反復)
- 2) 段で読む(各行ごとに①②の反復)

〈 第4部・単語 〉

発音が似通っていてまぎれやすい口形の単語を, 組み合わせて示す。組み合わせごとに①②を反復する。また, 見出しをテロップで示し, 1項目に数組の単語を提示する。見出しとその順序は次のとおりである。

- 1) ラ行とダ行
- 2) ヒとシ
- 3) つまる音
- 4) はねる音

〈 第5部・会話 〉

簡単な日常会話の場面として, 名前をたずねる短い会話を示す。問いと答えを一組として, 一組ごとに①②を反復する。映像は, 正面(やや斜めに向き合う形)半身の両名を同時に1画面に映す。

〈 第6部・文章 〉

日常生活の中にふつうにみられる程度の, やや長いまとまった話を, ひとまとまりのままに提示し, ①②を反復する。

- 1) 日常的な話題(ことばづかいの問題)
- 2) 物語(イソップ寓話の中から蛙の話)

IV 教材の製作過程

ビデオ教材の製作は以下のような段階を経て行った。

(1) シナリオの作成

テキストの構成プランに従って、単語・文章の選択と編成を行い、教材としての性格を考へて、全体で15分間でいどのシナリオを作成した。講義に際しては、実際に講義者自身が説明を加えながら使用する予定であるので、教材としての目的や意図・使用法などは、映像として内容に含まないことにした。

(2) モデル（出演者）の選択と訓練

本教材は、前述のとおり、模範・手本としての教材ではなく、あくまで日常的な無音の世界を体験させるために使用するのて、口形の特に上手なモデルは、かえって不適切である。ただし、不正確さや誤りがあつてはならないので、若干の人選を行い、教育学部国語科山口ゼミ所属の3年生の女子2名を選んだ。また、両名には、発音・発声・アクセントの癖をやや修正する訓練を行った。しかしこれも、普通の読みの練習程度にとどめ、十分に訓練することは避けた。

(3) 撮影と編集

撮影と編集は附属教育工学センターで行った。映像は、話者の肩から上の正面半身を、目の高さ（アイレベル）で撮影し、口元の動き（口形）の分かりやすい、できるだけ鮮明な画面を作るよう心がけた。そのために、照明を工夫し、口元に焦点を合わせた。また、原則として、モデルは、意味のある表情をしないようにした。なお、撮影と編集に使用した機材は以下のとおりである。

（撮影）カメラ SONY HVC-F1, レコーダ SONY SLO-383

（編集）SONY RM-440, SONY SLO-383×2

V. 本教材の講習での使用状況

1983年度の認定講習（7月27日～30日、9時～14時30分）において、講習日程の第3日目に、製作したビデオ教材を使用した。（本稿では、この講習の「言語指導の理論」の講習内容の全体の紹介は略す。）本教材は、「手話」の問題を扱ったのにつづいて、「音声が無くても言語をききとる（口形をよみとる）ことが可能であるかどうか」という問題提起の下に使用した。

「音声が無くても口形だけで言語をききとる（よみとる）ことが可能であれば、日常生活の上の不便は、かなりの点まで解消するし、より複雑な内容の伝達も可能である。しかし、果たしてそれは、日本語においてどの程度まで可能なことなのだろうか。」受講者が、このような問題意識の下に、本教材を視聴してくれることを期待した。また、これらの問題を音声・音韻論の視点から再考するため、本教材の視聴の次の時間に、日本語の音声・音韻構造の特色についての講義を行った。

講義対象は、長崎県下を主とする九州管内のろう教育担当者、計26名で、自分自身が聴覚障害を持つ者はいなかった。実際の視聴に際しては、全員が同時に視聴しながら、口形の微妙な変化を見取れるように、テレビの映像を比較的近くで見ることが必要であった。そこで、本学部の教育工学実験室とマルチ・メディア・ティーチング・システム（MMTS）（3人対3人で6人が向かい合って座れるテーブル1台ごとに、12インチテレビが1台セットされている。そのテーブルが21台あるため、126人が同時に視聴できる。くわしくは、文献3を参照。）を使用し、各グループごとに数名で1台のテレビが視聴できるようにした。

視聴の際は、計画のとおり、①の映像のみの部分が画面に出たときにききとって（口形

をよみとって)、内容をメモさせ、続いて、②の音声を伴う映像を見て、内容を確認めさせるという方法をとった。

VI. 受講者の反応 (受講者のアンケートの結果)

1. 講義者の感想

講義者としての講義後の感想を述べれば、ろう教育の認定講習の講義全体のなかで、本教材の目的とする「音のない世界を実感させる」ことは、おおむね達成されたように思う。また、受講者諸氏にも大変好評であったようである。受講者の講義中と講義後の様子や会話などから、本教材での学習を契機として、従来はほとんど意識することさえなかった「ことば」と「音声」とのかかわりの深さに改めて気づき、各自、「言語」の本質を考え直し始めてもらったように看取された。

2. アンケート調査の目的および受講者の年齢・性別構成

事後、本教材に対する受講者の反応を確認するために、資料2のようなアンケートによる調査を行った。また、アンケートの内容は、直接に今回の教材のみに関するものだけではなく、今回の教材をてがかりとして、ビデオ教材の製作や使用に関しての、受講者の状況や意識を知ろうとしたものでもあった。以下に、主要な項目についての集計結果をまとめ、それをもとに、今回製作した教材の評価を試みたい。なお、回収は、受講者26名中、25名であった。なお、受講者(回答者)の年齢・性別構成(アンケート項目1・2)は、図1のとおりであった。

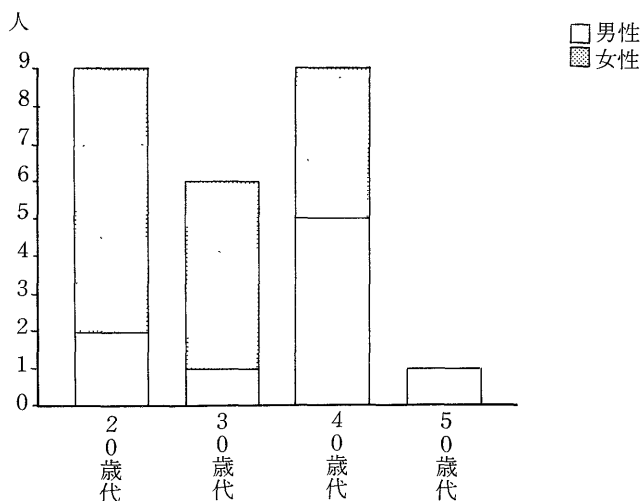


図1 受講者の年齢と性別

3. ビデオ教材の使用経験と製作経験（アンケート項目3・4・5）

表1 ビデオ教材の使用経験と製作経験

	使用経験		製作経験	計
	教える立場で	学習する立場で		
なし	18	15	21	54
1回	2	3	2	7
2回	0	2	2	4
3回	0	1	0	1
4回	1	1	0	2
5～10回	2	2	0	4
10回以上	2	1	0	3
計	25	25	25	75

ビデオ教材の使用経験と製作経験については表1のとおりであった。

まず、ビデオ教材の使用についてであるが、大半の人が、教える立場でも学ぶ立場でも、利用した経験を持っていないことが分かった。ましてビデオ教材の製作となると、わずかに4名が、1度か2度だけ製作した経験を持つのみであった。本教材に関する受講者の評価を調べる際には、これらのことを考慮に入れる必要があるだろう。たとえば、次の項の、「本教材の良い点・悪い点」に関する質問項目に対しては、製作技術に関する回答がなかったが、それも、受講者の製作経験の少なさによるものであろう。

また、今回の結果から一般的な傾向を知ることはできないが、ビデオ教材は、まだまだ教育現場で身近なものになっていないと推察できよう。

4. 本ビデオ教材の良い点と悪い点（アンケート項目6・7・8・9）

テキストの項目にもとづいて、発音、単語、五十音図、会話、お話の5つの部分を示し、複数回答で、良いと思った部分と悪いと思った部分とに○印を付けてもらい、それぞれ「それはなぜですか?」という質問に記述式で回答してもらった。結果は図2のとおりであった。

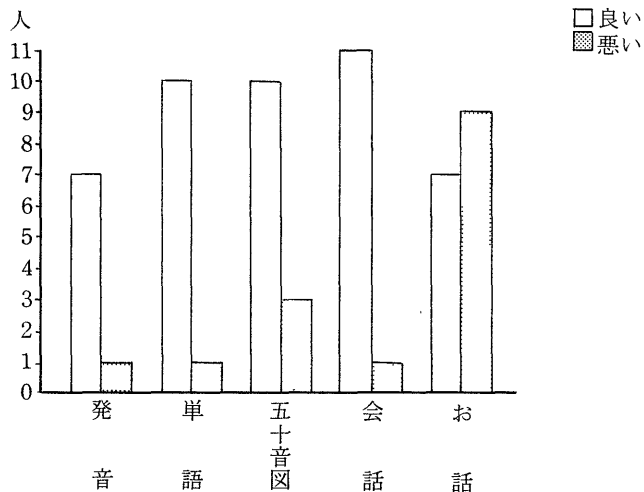


図2 本ビデオ教材の良い部分と悪い部分

このような、良い・悪いという判断は、基準が極めてあいまいであるが、理由の記述によれば、おおむね、ききとり（よみとり）の難易が判断の基準になっているように思われる。「お話」の部分に悪いという回答が多いのは、長い話が、ほとんどききとる（よみとる）ことができなかつたことに起因していると考えてよいだろう。

全体として「悪い」の項目は、あまり記入されていなかった。これは、無記名ではあるが、受講者が26名であり、年齢・性別の欄から、講義者が回答者を知ることができることや、自主作成教材であることを講義中に明らかにしておいたことなどから、(アンケートの前書きに、正直に記入してくれるように、ことわっておいたのだが)「悪い」とは記入しにくかつたためだと想像できる。

また、ビデオ教材に不慣れであるため、各人のはじめての経験として「おもしろかつた」部分を、「良い」として記入したということも考えられる。

「全体として良いと感じたか、悪いと感じたか（アンケート項目6・7）」という質問に対する記述式の回答も含めて、本教材の意義についての反応を整理してみると、たとえば、「耳のきこえない人の世界がどんなに不自由なものか良く分かりました。(28歳・女性)」という記述に代表されるような、「音のない世界の実感的な体験」という、本教材の基本的目的にかなつた意義を見出している回答が、25名中、18名にもおよんでいる。本教材のねらいは、一応達成されたと評価してよいと考える。

5. このような教材の今後の利用の希望と可能性（アンケート項目10・11・12・13）

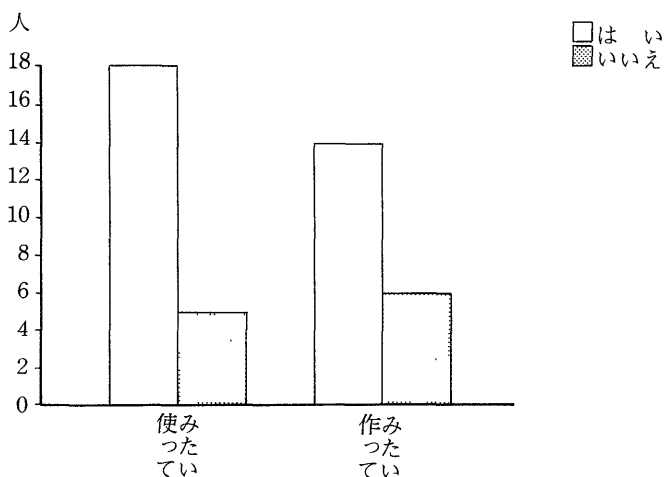


図3 このような教材の今後の利用の希望と可能性

結果を図3に示す。使用についても製作についても、受講者の関心は深いといえる。理由の記述では、肯定的な観点としては、「子どもたちが、テレビが好きで、関心を示すので、教育効果を期待できる」というものが目立つた。

また、実際上の問題としての抵抗もしくは否定的な観点の最大のもの、機器に対する具体的・心理的な抵抗である。「操作が難しい・分からない」という観点からの回答が6名あった。また、「現在のところ必要ない」という回答も3名あり、小人数担当のろう教育現

場においては、文字どおりマンツーマンの教育がなされている実態もうかがえた。

「使用対象者の可能性」としては、ろう児のほかに、難聴児・精神障害児・知恵おくれの子どもなどがあげられた。また、普通時にも「音のない世界」を体験させ、さらに朗読の指導にも利用できるという積極的な見解や、自分自身の発音の修正などの自己研鑽の具としたいという意欲的な意見もみられた。これは、この種のビデオ教材の利用の可能性が、入手や製作などの問題を克服できれば、将来ますます広がることを暗示していると考えられる。また、直接の発声指導・発音指導などの言語訓練に役立たせるほかに、現今の子どもたちに特に欠如しているとみられる「ひとの話を注意深く聞く習慣」や、そのための集中力を、子どもたちに身に付けさせるためにも効果があるという指摘が3名も見られた。

Ⅶ. 本学部の「国語教材研究」での利用と学生の反応

1. 教員養成学部での本教材の利用の意義

認定講習の終了後、アンケートの結果を整理してみて、山口は、このビデオ教材を、教育学部小学校教員養成課程3年生を対象とする、「国語教材研究」の講義においても利用することにした。

小学校は、子どもにとって初めて、母語（日本語）を、体系的・組織的に教育してくれる教育機関である。また、その教員は、そのような母語教育担当者である。母語の発音に敏感な子どもを育て、美しく正しい力強い日本語の発音が出来るように、すべての児童を指導することは、小学校教師のまぬがれない義務であろう。

ところで日本語のように音韻構造が単純で、開音節構造を持つ言語において、美しく正しい発音をするためには、口形（口のあけかた）が大きな役割を果たす。それゆえ、小学校教員は、少なくとも自分自身の発音・発声について、正しい明瞭な口形でそれをなしているかどうか、反省する視点を身につけていなければならない。

いっぽうまた、小学校の教師は、できるだけ速い段階で難聴児の発見につとめなければならないという義務もある。視力の低下は他人からも発見しやすく本人も気づきやすい。しかし、聴力の不足は概して気づきにくい。言語の習得という点からみれば、出来るだけ早く難聴児を発見し、はずかしがらずに補聴器を使用させる必要がある。十分な音の世界を持たなければ、言語能力の進展を保証することができないからである。

2. 実際の利用状況と学生の反応

以上の2点の必要性を考え、小学校教員養成課程の3年生全員が履修する「国語教材研究」において、「日本語の特色 ～音声と音韻～」の項目2時間のうちの1時間を、本教材の視聴にあてた。（受講者は2班に分かれ、前期の班は同年10月4日に視聴した。その反応を見て、翌年2月14日に、後期の班にも使用した。）学習方法としては、前記認定講習時と同様、教育学部実験教室で各グループごとに近い距離で画面を眺めさせ、口形の変化に注目させた。その際、前と同じ、① [口形のみ映像でききとり（よみとり）、メモをとらせ]、② [音声を伴う映像を見て確認させる]、という方法で視聴させた。視聴後、各グループで話し合いをさせ、「よみとりやすかった箇所」、「よみとりにくかった箇所」、「その理由」の3点について、グループごとにレポートを提出させた。

なお、学生の場合は、視聴の前の時間に、日本語の音韻構造についての概説の講義をす

ませており、撥音・促音などについては、映像を途中で止めて、口形との関係を随時説明した。

学生たちはきわだった興味を示し、(出演者が学友であったことも、その理由のひとつであろうが,)学習態度はきわめて熱心であった。2クラスとも、それぞれ150名あまりの大クラスであったが、全員が熱心にききとり(よみとり)を行い、各グループでの話し合いも活発で、レポートも良くまとめられていた。本稿ではその内容紹介はやや本題とずれるので省略するが、おおむね、「音のない世界」を初めて自覚的に経験して、衝撃を受けたとの内容が多かった。言語における音声の重要性を改めて認識し、発音・発声と口形との関係に気づき、各自が明確な発音をこころがけるだけでも、本ビデオ教材の使用の目的は達成できたと考える。学生たちは、「口形だけで音声がない場合、ことばがわからない」ことと、またその反面、「少し気をつけて注意深く見ていれが、口形だけでもかなりのところまで内容がわかる」こととの、どちらにも深い驚きを覚えたようである。つまり、それを知らなかったほどに、母語というものを無自覚・無反省に用いてきたということであろう。

VIII. 同様の教材の発音・発声指導での利用の展望

本ビデオ教材は、しいていえば、VTRの「かんづめの」利用ということになる。しかしそれは、けっして、典型を提示する(つまり、正しい発音・発声を示し、その指導そのものをめざす)ものではなく、ろう教育担当者自身に、「音のない世界」を実感として体験してもらうことを、直接の目的として製作した教材であることは、くりかえし述べてきた。そして、アンケートの結果などから、その目的が、達成されたと評価した。

さらに、本ビデオ教材を実際に製作し、ろう教育担当者および小学校教員養成課程の学生を対象に使用した結果、「音のない世界の体験」を適切に取り入れることによって、さらにすすめて、発音・発声の指導に直接に役立つようなビデオ教材の開発が可能であると考えるに至った。その際の利点としては以下のようなものが考えられる。

1. まずビデオの特長という点から

- (1) 同じ映像を何回もくりかえし用いることができる。
- (2) 音声と口形の関係を視覚的にとらえることができる。
- (3) 発音行為を分析的にとらえることができる。(必要に応じてストップモーションやスローモーションを用いる。また、正面と側面からのアングルで撮影する。)
- (4) 日本語の音韻体系に即した、組織的かつ合理的な順序で構成しうる。
- (5) 言語自体による説明が十分に行えない学習者(母語を初めて体系的に学習する児童や、日本語を第2・第3言語として習得しようとする外国人など)にとっても、映像による理解しやすい教材を実現できれば、単なる音声のみの教材に比して、より学習効果を期待できる。

2. また、音声の無い世界の体験(聴覚障害児の言語活動の疑似的体験)という点では、

- (1) 音のない世界の体験に対する驚きを、学習の動機付け、学習意欲のリフレッシュなどに用いることができる。
- (2) 音声のない映像を視聴させ、口形がよければ、口形だけでかなり判断できることを体験させることによって、つねに口形に注意する態度を形成できる。

- (3) 学習者に対し、アトラクティブな教材となりうる。
 (4) 単なる視聴にとどまらず、ききとり(よみとり)や確認の部分によって、学習者自身が参加してゆく能動的な学習形態を維持できる。

日本語の標準的な発音・発声指導のためのビデオ教材を作成し、主として初等教育の初期段階で効果的に利用することは、可能でもあるし、必要でもある。とくに、前記の利点1の(4)「日本語の音韻体系に即した構成」という面での、根本的な理論構築が当面の急務であろう。今後、機会があれば、教材を全体として一貫利用できるだけでなく、必要に応じて部分的に反復指導することができるような、ビデオ教材の開発をめざしたい。

〈 謝 辞 〉

本教材の撮影・編集に際して、教育工学センターの吉岡正文技官に御指導・御協力を頂いた。また、井手尚子・黒岩和美の両学生には、本教材に出演して頂くだけでなく、画面の構成などに関するいくつかのアイデアをも提供して頂いた。併せてここに記し、謝意を表す次第である。

〈 文 献 〉

- 1) 教育科学研究会・秋田国語部会(1966)「にっぽんご」5.発音とローマ字 麦書房
- 2) 安野光雅・大岡信・谷川俊太郎・松居直(1979)「にほんご」福音館書店
- 3) 八田昭平(1981)教育方法論の授業における理論と実践の結合について 長崎大学教育学部教育科学研究報告,第28号,pp39-58
- 4) 有光成徳・岸本唯博編(1972)自作VTR教材の入門(自作視聴覚教材の手引き②)第一法規
- 5) 岸本唯博監修・松下視聴覚教育財団編(1978)VTR/教育(視聴覚教育選書②)ラジオ技術社

〈 資 料 1 〉

ビデオ教材・テキスト(____はテロップ。◎ごとに,①[音声を消した映像],②[音声を伴った映像],を反復。)

モデルA 第1部・短文 一導入部として一

- ◎ ないたり ほえたり さえずったり,
 こえをだす いきものは,
 たくさんいるね。
 けれど ことばを
 はなすことの できるのは,
 ひとだけだ。 (「にほんご」pp4・5同書の原文は縦書き)

モデルB 第2部・音節

1.母音

- ◎ イ・エ・ア・オ・ウ

2.はねる音

- ◎ イン・エン・アン・オン・ウン

3.はれつ音

- ◎ パ・ピ・プ・ペ・ポ

- ◎ タ・テ・ト

- ◎ カ・キ・ク・ケ・コ

- ◎ バ・ビ・ブ・ベ・ボ

- ◎ ダ・デ・ド
- ◎ ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ

4. はじき音

- ◎ ラ・リ・ル・レ・ロ
- ◎ ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ

5. まさつ音

- ◎ チ・ツ
- ◎ ザ・ジ・ズ・ゼ・ゾ
- ◎ チ・ヅ

7. 鼻音

- ◎ マ・ミ・ム・メ・モ
- ◎ ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ

8. 半母音

- ◎ ヤ・ユ・ヨ
- ◎ ワ

第3部・五十音図

モデルA 1. 行でよむ

- ◎ ア・イ・ウ・エ・オ
- ◎ カ・キ・ク・ケ・コ
- ◎ サ・シ・ス・セ・ソ

(以下同様に、タ行からワ行まで)

モデルB 2. 段でよむ

- ◎ ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ
- ◎ イ・キ・シ・チ・ニ・ヒ・ミ・イ・リ・イ

(以下同様に、◎ウ・ク・ス…、◎エ・ケ・セ…、◎オ・コ・ソ…)

第4部・単語

モデルA 1. ラ行とダ行

- ◎ ランプ — ダンプ
- ◎ クラ — クダ
- ◎ カエレ — カエデ
- ◎ ロク — ドク
- ◎ イロ — イド

2. ヒとシ

- ◎ ヒマ — シマ
- ◎ ヒモ — シモ
- ◎ ヒロイカミ — シロイカミ
- ◎ ツナヲヒク — ゴザヲシク

モデルB 3. つまる音

- ◎ パパ — カッパ
- ◎ オト — オット
- ◎ ハカ — ハッカ
- ◎ カシャ — カッシャ
- ◎ アハハ — アッハッハ
- ◎ キッテ ◎ バッタ ◎ ラケット ◎ ネット

- ◎ ニッキ ◎ ガッコー ◎ セッケン ◎ コッキョー
 ◎ ザッシ ◎ イッスンポーシ ◎ ハッシヤ
 ◎ コッソリ ◎ マッハ ◎ バッハ

4. はねる音

- ◎ テーテン ◎ カバーカバン ◎ マトーマント

モデルA・B 第5部・会話

- ◎ [モデルA あなたは だれ?
 モデルB わたしは かずこ。
 ◎ [モデルB あなたは だれ?
 モデルA ぼくは あきら。
 ◎ [モデルA だれが かずこちゃん?
 モデルB わたしが かずこ。
 ◎ [モデルB だれが あきらくん?
 モデルA ぼくが あきら。
 ◎ [モデルA あなたが ゆりこちゃん?
 モデルB いいえ わたしは かずこです。
 ◎ [モデルB あなたはあきらくん?
 モデルA はい ぼくが あきらです。

(「にほんご」 pp50-52)

第6部・文章

モデルB 1. 日常的な話題 (言葉づかいの問題)

- ◎ ひとと なすときには
 わかりやすいように
 はっきり はなそう。
 ともだちどうして はなすときに くらべて、
 しらないひとと はなすときには
 ことばが ていねいに なるね。

(「にほんご」 p53)

- ◎ じぶんのことを いうとき、
 にほんごには いろいろな ことばが ある。
 わたし、ぼく、おれ、わし、うち……
 せんせいは、じぶんで じぶんを
 せんせい ということもある。

あいてのことを いうときにも、
 にほんごでは いろいろな ことばを つかう。
 あなた、きみ、おまえ、おたく、あんさん……
 せんせいは もうひとりの せんせいに むかって、
 せんせい というこゝも ある。

えいごでは、じぶんは いつも I (あい)
 あいては いつも you (ゆう)
 にほんごの いいかたと えいごの いいかたの
 どっちが いいかは きめられない。

(「にほんご」 pp54-55)

モデルA 2. 物語 (イソップ寓話の中から蛙の話)

にひきの かえるのこが、いけのほとりで あそんでいました。

そこへ うしが みずをのみにやってきて、まちがって いっぴきの かえるのこを ふみつけて、ころしてしまいました。

こがえるが いっぴき みあたらないことに きがついた おかあさんがえるは、にいさんは どこにいるのかと たずねました。

「おにいちゃんは しんでしまったよ、かあさん。よんほんあしの ものすごく おおきなやつが やってきて、どろのなかに ふみつぶされてしまったの」

「ものすごく おおきなやつ ですって。このくらい おおきかったかい」というと、おかあさんがえるは、せいっぱい おおきくみえるように、ぶうつとからだを ふくらませました。

「うん！ そう、もっと おおきかった」

おかあさんは、ぶうつとからだをふくらませて、

「これくらい おおきかったかい」

とききました。

「うん！ そう そう かあさん。でも、も一つも一つと おおきかった」とかえるのこは いいました。

すると、またおかあさんがえるは、ぶうつぶうつぶうつと からだを ふくらませましたので、ぼーるのように、まんまるに、なりました。

「これくらい……」

といいかけたときです。おかあさんがえるは、とうとう はれつしてしまいました。

(「にほんご」 P157)

＜ 資 料 2 ＞

ビデオ教材についてのアンケート

このアンケートは、今回使用したビデオ教材について、さまざまな御意見を頂き、今後のより良い教材作成のための、参考にさせて頂くことを目的としたものです。

このアンケートの回答内容は、調査員が責任を持って管理します。また、このアンケートの年齢の回答をもとに、回答者が誰であるかを同定するようなことは行いません。

そこで、感じたことや思ったことは、正直にお答え下さい。また、答えられない所や答えたくない所は、空欄のままにしておいて下さい。

1. 年齢は _____ 歳
2. 性別は (男・女)
3. このようなビデオ教材を使って教えたことは、今までに何回ありますか ? _____回
4. このようなビデオ教材を使って勉強したことは、今までに何回ありますか ? _____回
5. このようなビデオ教材を御自分で制作されたことは、今までに何回ありますか ? _____回
6. 今回の教材は、全体として、どんな所が良いと感じましたか ?
()
7. 今回の教材は、全体として、どんな所が悪いと感じましたか ?
()
8. 良いと感じたのは、どの部分ですか ?
(発音・単語・50音・会話・お話)
それはなぜですか ? ()

9. 悪いと感じたのは、どの部分ですか？
(発音・単語・50音・会話・お話)
それはなぜですか？ ()
10. このような教材を、自分でも使ってみたいと思いますか？ (はい・いいえ)
それはなぜですか？ ()
11. このような教材を、自分でも作ってみたいと思いますか？ (はい・いいえ)
それはなぜですか？ ()
12. 11か12に「はい」と答えた方におたずねします。
それは、どのような学習者を対象とした、どのような教材ですか？
対 象 ()
内容や特徴 ()
13. その他、ビデオ教材について、何でも自由に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。

教育学部 国語教室 山口 康子
附属教育工学センター 大谷 尚